創立 80 周年記念誌より **〈私と芝商〉**

昭和 40 年卒業生　声優　神谷　明　様

声優という仕事を始めて（平成 16 年現在で）35 年となる。しかし、自分が芝商にはいってなかったらそれもなかった。商業高校と声優、全く関係ないように見えるが、実は部活動（演劇部）がその原点なのだ。当時の芝商演劇部は、佐々俊之先生のご指導の下、レベルの高い活動を続けていた。私は 1 年の二学期から演劇部に参加し、勉学の傍ら、芝居作りの楽しさに引き込まれていった。文化祭、演劇コンクール卒業生謝恩会などを通じ、先輩や後輩たちと一つになって一本の芝居を作り上げていく。ある時はスタッフとして、またある時は出演者として、それこそ休日返上で頑張った。今思っても、あのエネルギーはどこから生まれてきたのだろうと不思議な感じがする。しかし、その時に知ったモノづくりの楽しさ、チームワークそして友情は、間違いなく自分の礎となっている。

芝商での思い出はまだまだある。全校生徒が縦割りの学園ごとに競い合った体育祭もその一つだ。先輩のご指導の下、自分たちで観客席から（バックと呼んでいた）背景画まで作っていく。材木を運び、荒縄で組み上げるけっこう危険な作業をよく無事にこなしたものだ。みんなで描いた大きなバックを設置した後は応援合戦の練習だ。一つになるというのは、あのようなことを指すのだろう。夢中になって応援のやり方を覚えたものだ。1 年生の時、私はG学園だった。3 年生は芝商最後の男子クラス。バンカラ気質が残っており、格好の良い先輩がたくさんいた。体育祭の結果などの記憶は残っていないが、先輩にかわいがっていただいたことはハッキリ覚えている。確か、初めて喫茶店に連れて行ってもらったのも、（今だから言えるがたぶん校則違反だ…）その時だった。良い先輩や先生に囲まれ、幸せな高校生活を送らせていただいた。

さて、この仕事に就いて、商業高校を出て本当に良かったと思ったことがある。それは商業科目、特に簿記を学べたことだ。我々の職業でも経理は大切な仕事の一つだ。その時に、伝票や帳簿の付け方、仕訳の仕組みなどの知識が大いに役立っている。また、数字を見ても臆することもない。私は今この文章をパソコンで打っているが、文字入力はローマ字。これも英文タイプという科目があり、キー操作に慣れていたからに他ならない。蒲田にある日本工学院専門学校演劇科の講師も務めたことがあった私であるが、通勤途中、車窓から母校を見るたびあの学校を出てよかったとちょっぴり胸を張っているのだ。